精霊使いと疫病神

くるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊使いと疫病神

【Ｎコード】
Ｎ２４８９ＢＡ

【作者名】
くるる

【あらすじ】
各人が精霊と契約してその恩恵をあずかる世界。主人公ツキトは一世一代の大仕事、自らの「精霊召喚の義」の際に何故だか疫病神を召喚してしまう。成り行き上彼は疫病神と契約することになるのだがそれは実はとても大きな意味を持っていた！

どうぞよろしくお願いします。

プロローグ

暗い、湿った森の中一人の青年が歩いていた。枯葉が敷き詰められた茶色の地面を踏みしめてゆっくりと進んでいた。夜中にもかかわらずこのような森の中を歩く彼は何者なのだろうか。

「でさ～……笑っちゃうよな」

彼はなにやら独り言をつぶやく。森の木々が彼の声を包み込み、その声が遠くまで聞こえることはない。断片的に聞こえてくるそれはまるで誰かと話しているかのようであった。青年の声と木々のざわめきだけが小さく流れるこの森の中、突如としてそれを破る男の大声が青年の耳をつんざいた。

止まれ！

青年の目の前の茂みからそれは聞こえてきた。彼はすこし驚いた風にすると立ち止まり、茂みの向こうに目を凝らす。

「オイ、貴様、その身ぐるみを置いていけ。なに、悪いようにはしないさ」

茂みが大きく揺れた。がさがさ……葉をかき分ける音がして、現れたのは5人の男たちであった。全員が全員、とても汚らしい服を着ている。さまざまな服の一部を接いで作られたものなのか、色が部分によって異なっている。手には小ぶりの曲刀を携え、それを腰だめに構えている。その様子を見て青年は「ああ、山賊か」などと一人納得していた。何やらうなずくと、青年は一歩踏み出す。枯葉が小さな音を立てる。

「警告が聞こえなかったのか？」

男の一人は強気に言った。しかし、それに反して男たちは一様に焦っていた。この絶対的不利にあって、自分たちに向かってくる青年に得体のしれない恐怖を感じていた。枯葉のつぶれる小さな音が妙に耳につく。

「ん？きこえた。服だろ、ほしいの。けどさすがにここでこれを脱ぐとさ、寒いし」

青年はあっさりと答える。小さく笑って言う彼の様子に山賊一味はさらにその困惑を強める。一歩、また互いの距離が近づいた。

「と、止まれ！俺たちにはこれがあるんだぞ！」

そういって曲刀を突き出す。その切っ先は小さく揺れていたが、山賊たちはそれを自覚できていただろうか。

「おっかないなあ……いいよ、かかってきても。けどそれを俺はお勧めしない。だって俺は不運だからさ」

意味が分からない。理解できない。それは人間にとって恐怖を生み出すことに十分だった。そして恐怖を拭い去るために、人間がとりえる行動は非常に少ない。そのうち一つが得体のしれないそれよりも自らが上位であることを確認すること、すなわち、

「行くぞ！野郎ども！」

暴力の行使であった。それを見た青年は大きく息を吐く。互いの距離はもうあと3歩ほどにまで迫っているにもかかわらずその顔に緊

張感はない。すこしだけ自らの肩のあたりをちらりとうかがうと、小さな声で紡いだ。

「災厄招来、風(ふう)」

その一言。それだけで迫っていた男たちすべてが吹き飛んだ。森の青い葉を巻き込んで巻き上がった風が男たちを青年から弾き飛ばし、男たちは木々の幹に衝突し、昏倒する。

一度舞い上がった葉たちがひらり、ひらりと落ちてくる。その中で一人青年は立ち尽くしていた。

「やっぱ、俺ついてねえや」

そのすべてが地につき、枯葉の中に溶け込んだころに彼はそういって、再び歩き出した。

ツキトとフウ

「はっくしょん！寒いな……おい」
「あはは、それ相応の報いじゃ、観念せい」

暗い森の中、二人の男女が歩いていた。そのうち一人、男のほうは先ほど山賊たちを吹き飛ばした青年であった。彼の名はツキトという。黒の上質なコートの襟を立てて顔をうずめるようにして歩いている。冬の気候が彼には厳しいのか、鼻水が垂れていた。そしてその隣、彼の肩口のあたりにもう一人の女がいた。どうやら空中に浮いているようである。

「あの程度の「厄」でこれだけって、お前、もうちょっとましにできないのかよ」

青年は女に向かって言う。女は非常に幼かった。背丈は青年の腰ほどまでしかないであろう。胸のふくらみも、女性的な曲線もない、発展途中の身体であった。白いワンピースを身にまとった彼女、その美しいつやのある黒髪が森の中を流れていく。彼女は何やらとてもうれしそうに顔をニヤつかせている。

「無理じゃな。人間、万事塞翁が馬。良いことの後には悪いこと。仕方ないの」
「フウは神様じゃねえか。すこしくらい操作してくれてもいいだろうが……」

神様、そういわれた彼女はツキトとひょんなことから契約することになった神様、名前をフウという。

「ふだんやっておることがそうであろうが。運の絶対量は決まっておる。それは不変の定理じゃ」
「そういうもんなのかよ。一応俺とフウは契約関係にあるんだから、少しくらいできるんじゃないのか？「不運量」へらしてくれよ、頼むって」
「まあ……できんことはないぞ」

彼女は神様、その中でも特に限定していえば疫病神であった。人々の不運を総べる神である。ツキトはあまりにつらい自らの現状を改善するべく、フウに自らの「不運量」を減らしてほしい、と懇願しているのであった。「不運量」が多いほどにその身に降りかかる災厄は大きくなっていくのだ。

「マジか！どうやるんだ？なあ、なあ！」
「やり方は普段と同じじゃ。先ほどのように主が「運」の先取りをする。それはもう、運の絶対量の定義すらあいまいになるほどの幸運をかき集める。その幸運でもって「運の絶対量」を無為にするのじゃ」
「おう、それでそれで？」
「主に幸福が訪れて……」
「おう、いいね、いいね」

ツキトが表情を明るいものにしていく。鼻水もその勢いを弱めて切ったような気がする。

「しばらくするとまた「吹き戻し」でつらくなる。それはそれは大きすぎてバカにならんほどの吹き戻しじゃな」
「またそれかよっ！！」

はっくしょん！青年の大くしゃみが森の中を反響する。それを見て

フウは小さく顔をしかめていた。

「まったく汚いのお……」

「仕方ねえだろうが、「吹き戻し」中なんだからさ。フウ、これマジどうにかならないの？」

「ならん、運の絶対量は決まっておるからの」

フウの力、それは運を調節する力であった。先ほど山賊たちを撃退したのも実はツキトの力ではなくて、フウのものであった。

「先ほど儂は主の不運を少な目に調整したのじゃ、それに応じて「風が山賊を撃退する」という幸運が訪れたわけじゃ。わかるよの？」

「ああ、そういう不運を俺は呼んだ」

フウは運の配分を調節できる。先ほどはツキトの不運量を減らす、すなわち幸運な状況にすることによってまねかれた、「偶然にもツキトには何の影響を与えない空気の塊」が発生し、山賊たちを撃退したのだ。

「しかし運の総量は決まっておる。いわば前借じゃな。今の主はその返済のための不幸の中にあるのじゃ」

「わかってるよ……はくしゅん！」

「まあじきに収まるじゃろ、辛抱じゃな」

「わかったよ……うう、さむいな」

「人間万事塞翁が馬」

「幸運」を先取りしたツキトは今、極寒という「不運」に陥っているのだ。ゆえに一人凍えそうなほどに縮こまっている。

「それにしても主、いまさらだが一ついってよいかの」

「なんだよ」
「そうつっけんどんにするでない。まあ、おせっかいかもしれんが……」
「行ってみろって、怒んないからさ」
「うむ、では遠慮なく。主は、本当についてないのお……」
「うるせえ！知ってるわ！こんな広い森の中のしかも人なんかほとんど通らないけもの道をうろついているにもかかわらず山賊に絡まれてる時点でうすうす察してたわ。ていうか誰のせいだと思ってやがる！」
「日々の行いの悪い主のせいよな……」
「違うわっ。疫病神たるフウの姓だろうがよ。というかフウ、一つ気になってたんだがなんで精霊をよんだはずの俺の呪文に答えてお前が出てきたんだよ。あそこからだよ……俺の不幸ライフが始まったのは……」

ツキトはそういって足を速める。それに少し驚きながらもフウはつーっと空を飛び、彼の肩まで再び追いつく。

「うーむ。なぜか、のう……」
「俺はかっこいい風の精霊を呼ぼうとしてたんだぜ、にもかかわらず、だ。なんでフウみたいな未発達幼女が、って痛い痛いって、許して！」

フウの強烈な右ストレートがツキトの顔面に炸裂した。

「もう一度いてみるがいい、主よ。その言い訳によれば……わかっておるよの？」
「ごめん、悪かった、痛い！ゆるしてっ」

フウはしばらく空中からのストレートの猛打をあびせていたが落ち

着いたのかまたひっそりとツキトの脇を浮遊する。声色を落していった。

「まあ、簡単に言えば情けよの」

「情け？」

「……言ってはなんだがの、おぬしには力不足だったのじゃよ。そのランクの高位精霊を従えるのはの。見向きもせんかったぞ、やつら」

この世界の人間は通常、精霊と呼ばれる存在と契約することになる。精霊はこの世界の見えないどこかに存在していてそこは「霊界」と呼ばれている。彼らはそれぞれ大きな力を持っており、それは各個体によって大きく異なる。彼らは霊力、と呼ばれるものをその体の主成分にしており、霊界にはそれが満ちている。しかしここ、人間界の自然にはそれが一切ないのだ。彼らが単体でこの世界に降りた場合、霊力の不足から徐々に体が決壊し、最後には消滅してしまう。

「俺の霊力が足りなかったってことかよ……」

「そうじゃな」

ゆえに人間は擬似的な霊力を作りだすのだ。それは人間の精神力と体力を基に作られるもので、個人でその限界量が決定されている。そしてその霊力に見合った精霊を召喚することになる。人間の霊力によって精霊の人間界への現界を補助するのだ。

「高位精霊たちは要求する霊力が途方もなく高いのじゃ、仕方あるまいの」

「なんでオリトに出来て俺ができなかったんだよ……」

「才能の差、じゃな」

「うるさい、しってら！」

そしてより高位の精霊になるほどに現界に必要な霊力量は増加する。その最高位、大精霊クラスをツキトは召喚し、契約するつもりであったのだが、それにあえなく失敗したのであった。

「まわりの生徒がぞくぞくと契約を取り付けている中一人しょぼくれている主がかわいそうでならんくてのう」

「フウ、ありがとう……」

「いきなり気持ちが悪いぞ、主よ」

「あの時は本当に切なかったんだ……フウのおかげであの後の大会でもいい結果が残せたんだった……」

ツキトが立ち止まってフウの細い腕をとる。がっちりと指を絡め、はなさない。彼の眼はなぜだかうるんでいた。

「お、おう、そうじゃな……しかしあのときの吹き戻しは壮絶だったのう」

精霊の召喚に成功した彼らはその直後、お披露目会とばかりに互いの精霊の技をぶつけ合うのだ。そのトーナメントでツキトはめでたく優勝を飾った。

「ああ、あのときの奴らの吠え面ときたら……傑作だったぜ」

「主の人間性がよく現れる一言よの……」

「そうだ！あの時の吹き戻しに比べれば今のこんなのやすいやすい！」

5戦ほどを重ねただろうか。多くの「不運量操作」を大した説明も受けずに揮った彼は、それはそれは壮絶な吹き戻しを食らったのだった。彼曰く、「死にそうなほどに壮絶な3日間だった」そうだ。

「なんだか元気がわいてきたぞ、フウ！」
突如として笑顔になるキリトの様子に若干フウは引きつつも、同じく笑顔で答えた。
「それはよかったの、では学園都市までの足取りをはやめるかのう」
「ああ、吹き戻しもずいぶん収まってきたぜ！」
そういってツキトは駆け出す。寒気はどこかへ行ったのだろうか、コートの襟を畳み、その首筋をあらわにする。
目指すは学園都市、彼が精霊について学び、そしてフウと契約した場所でも……
「いってえ！」
その道中、ツキトがその第三歩目くらいで壮絶にこけていた。
「フウ……これは？」
地面に額を打ち付けたツキトがいう。
「素、じゃな。吹き戻しは終わっておる」
「やっぱりついてねえええ！」
ツキトの絶叫が響く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2489ba/

精霊使いと疫病神

2012年1月6日15時50分発行